

第13回 教材工夫展 研究発表

「弁別の基礎」

吉瀬 正則

2006年8月22日

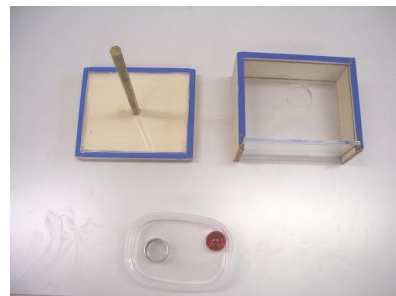
国立オリンピック記念青少年総合センター

本報告は、第13回教材工夫展の発表を動画とともにご紹介するものです。

- ・15歳から水口俊先生の指導を受けていた渡邊祐輝さんの弁別学習の記録です。この弁別学習は、元々は、信号を理解させたいという保護者の思いから始まったものです。
  - ・パネルディスカッションでは、母である渡邊麻理子さんが、ご自身が基礎学習の大切さに気づいていく過程をお話してくださいました。
  - ・基礎学習を通して息子さんの「わかり方」を理解することができ、そのことにより、息子さんの自傷の意味がわかり、また、働きかけのタイミングをつかむことができるようになったとのことでした。
  - ・学習の目的は、単にできるようにすることではなく、その過程を通してお互いにわかりあうことであるということ、そのことにより、穏やかに日々を過ごせることの尊さが、親の立場から語られていました。
- \*渡邊さん親子は残念ながら不慮の事故により亡くなっていますが、第13回の発表は本名でさせていただきましたので、そのご好意を継承させていただきます。

**STEP 1 触覚と運動による弁別（分類的弁別）**

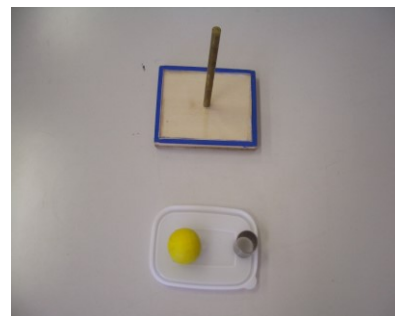
たくさん学習をしたが、その中で弁別学習に絞って報告します。保護者の渡邊麻理子さんがおっしゃるように、色のマッチングはできているようだったが、「あか」「あお」というような言葉で指示すると、頭を叩くなどの自傷がでてきた。試しに、リングと玉の弁別課題を行うと、黄色くて目につきやすい玉をまず取り上げ、ポール（棒）の上に乗せるなどの動作があった。1回失敗すると、次からはリングはポールにさし、玉は箱の穴



に入れることができた。しかし、棒にリングをさすときには、一回入れて下までいかずに一度抜き、もう一回さすなど、運動的な触感により、これでいいかどうか試している様子があった。

**STEP 2 触覚と運動による弁別（選択的弁別）**

手前（子どもの側）に選択肢（リング、玉）を2つ置き、30cmほど離してポール（棒）を置くと、またわからなくなりました。この提示の仕方だと、ポールの形状をまず記憶して、それを頭に置きながら手前の2つを見比べ、記憶と照らして合うものを選ばなければならない。祐輝くんは、手前の2つを見比べていると、遠くにある棒を忘れてしまうようであった。



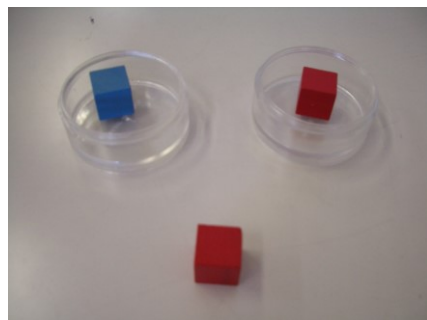
どうしていいかわからなかったときに、祐輝くんは、ポールを手前に引き寄せた。「そうしないとわからない」というメッセージだったと思う。

ここで、ワーキングメモリが狭く、目の前にあるもので考えているとき、目の前にないものの

ことは記憶してられないことがわかった。それは、認知できる空間の狭さととらえることもできる。このような場合、提示の方法がきわめて重要になる。つまり、リング、玉、ボールの3つが一度に目に入るように、ボールを近くに置く必要があるということをごちらが理解していなければならない。

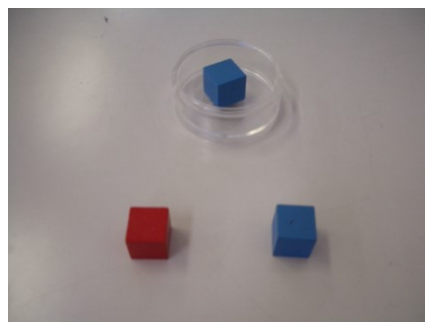
### STEP 3 視覚による弁別（分類的弁別）

次に、運動や触覚による手がかりをなくし、視覚だけで弁別する課題を提示した。向こう側にお皿が2つある。各お皿に「あか」など色の名称をいいながら、見本のキューブを入れていく。選択肢を1個だけ渡し、同じ色の皿に入れるように促す。色のマッチングは以前からできていたので、「見本を示せば」この課題は簡単だった。すぐに課題を理解し、すばやい動作で行った。支援者は、子どもの動作と同時に「あか」「あお」などと言葉をのせた。子どもの動作に合わせてタイミングよく適切な言葉を入れること、子どもが「できた」と思った瞬間にほめることが大切であると常々水口先生がおっしゃっている。



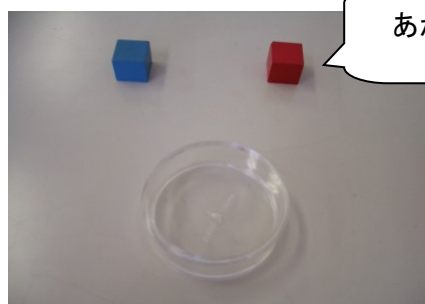
### STEP 4 視覚による弁別（選択的弁別）

この、視覚的操作による課題でも、選択的状況を作るととたんにできなくなった。手前に選択肢2つを提示して、向こう側に見本の入ったお皿を置くが、お皿が遠すぎると課題の意味がわからなくなってしまう。お皿を近くに引き寄せると、瞬時にマッチングの課題であることを理解して、そこに同じ色を置く。触角と動作による弁別でもそうだったように、①記憶の容量が狭い ②認知できる視空間が狭いことがよくわかった。



### STEP 5 言葉のみによる弁別（選択的弁別）

次に赤と青のキューブをひとつずつ提示し、「あかをください」という課題を行った。ここでは、見本を提示しないので、視覚的にマッチングするということができない。言葉のみでどれをとったらよいか判断しなければならない。最初のうち、正しい色を選択したので、色の名前がわかっているようにみえた。しかし、2-3回続けるとだんだん機嫌が悪くなり、ついに怒って首をつかまれてしまった。

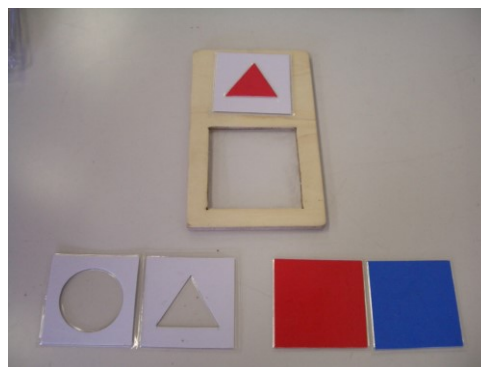


お皿を持ち、その手に赤いキューブを持って「あかをください」といえばできる。ここでも、同じ教材でも提示の仕方によってずいぶん違うということが明らかになった。提示の難易度は、分類状況が選択状況よりも易しく、触覚的運動的の手がかりがある方が視覚だけの手がかりのときよりも易しく、また、触覚的、視覚的の手がかりをなくして言葉のみで判断する課題にすると、格

段に難しくなる。このように、言語課題になるとできないということは本人がよく知っており、この後の学習でも、言語課題になるととたんに自傷や他害がはじまった。触れられたくない「琴線」に触れるようなもので、おかあさんの麻理子さんは、このように課題を通して、本人の自傷のわけを理解していったと思われる。

#### STEP 6 視覚的手がかりにより、色と形という複数の要素を処理する

しかし、日常生活は、常に流動的で、周囲の状況に合わせて柔軟に思考の軸を変えることが要求される。そのため、こちらの指示（意図）を理解して、柔軟に色で弁別したり、形で弁別したり、ということができるようになることが望ましい。言葉によってはわからなくても、目で見えてわかるように教材を工夫すれば、弁別には基準があり、その基準は時と場合により入れ替わるということが体得できるのではないだろうか。

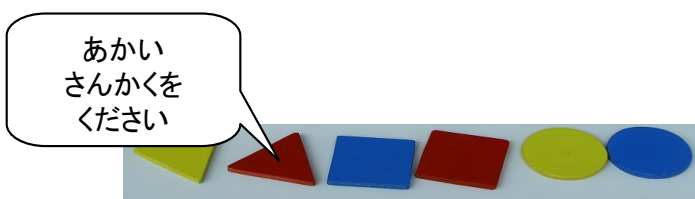


そこで、右のような教材を工夫した。

これは、見本を見ながら、最初は色で「あか」という指示に応じて赤いカードを入れ、次に形で「さんかく」という指示により、三画の形を入れると、見本と同じ赤い三角ができるという教材である。これを行いながら、子どもは弁別には色という基準と形という基準があることを、動作を通じて理解することができる。言葉はわからなくても、動作と一緒に言葉を聞くことで徐々に動作に言葉が結びついていくのではないだろうか。

#### STEP 7 言葉だけで2つの要素を処理する

最終的な目標は、言葉だけで複数の要素を処理できるようになることである。そうすれば、概念形成につながり、日常生活でもその時々 conditions に合わせて言葉で行動を調整し、柔軟に対応できるようになるだろう。今はまだ、言葉の課題に踏み込むことができないので、視覚的な手がかりを十分に与えて取り組む段階である。



#### 日常生活とのつながりについて

おかあさんが望んでいる信号の理解とのつながりだが、STEP 4の選択的状況でよくわかるように、赤と青の弁別ができていても、マッチングするものの距離が離れていると課題の意図そのものがわからなくなってしまう。手前にある赤と青を分けることができても、信号の変化に合わせて行動することにはつながらないということだろう。信号を理解して、それに合わせて行動するためには、他にどんな能力が必要なのだろうか。